

『出口のない海』——2006年夏

「回天」特攻の出撃基地、 山口・大津島で老人と出会った

「戦争というものは本当に全くないほうがいい。これはわれわれの本音ですからね」

老人は、最後の最後に、念を押すようにそう言った。

高松 工さん、84歳。元海軍航空隊にあって特攻作戦を練った一人である。

山口県大津島——映画にもなった横山秀夫著『出口のない海』が描きだす

人間魚雷「回天」の基地の島だ。

8月、セミしぐれの島で、高松さんは語りつづけた。

3時間にわたった、ひりひりするような証言の記録である。 学生記者 池内真由(法学部2年)

新幹線徳山駅の近く、大津島へ向かうフェリー乗り場には、真新しいポスターがかかっていた。映画「出口のない海」のポスターだ。青い海底で、市川海老蔵が野球ボールを握り締めている。甲子園で優勝した投手が、人間魚雷「回天」に志願し、散っていく……映画はこの夏、若い人の間でも話題になった。

——横山秀夫さんの『出口のない海』で、大津島の認知度が高まりましたね。

高松 実は10年前から私は関係しとるんですよ。何度もね、取材を受けましたよ。

——10年も前から。

高松 しかしあれはね、ああいうのは、作者が事実に忠実にやったら本が売れんことになるんですわね。だから本や映画で脚色することはけっこうだ、と私は言っとるんですよ。10年くらい前に本だけださず、さっぱり売れんかった。ところが漫画出したらバアツてまた本が売れ始めて。それで映画にすることになったんです。

8月12日、快晴。3、40分ほどのフェリーの旅。何頭ものイルカが群れをなして泳いでいるのが見える。入道雲の下に、大津島は浮かんでいた。

《大津島(山口県周南市)は、第二次世界大戦中、人間魚雷「回天」の発射訓練基地の一つだった。「回天」の名には、戦局が悪化する中で、「天を回らし戦局を逆転させる」の意がこめられている。魚雷に人間が乗り込み、敵軍に打撃を与えるという作戦だった。海の特攻隊である。記録によれば、回天作戦による戦没者は1299人にのぼる。うち搭乗員は106人、没年齢は平均20・9歳。ちょうど私たちと同年代だ。あまりにも若い》

「回天記念館」がある。回天発射訓練基地跡は当時のままに残されていた。一泊の予定で、その日は島の無料貸し出しの自転車で島のあちこちを見て回った。5平方キロに満たない小さな島である。

記念館に行くまでの長い道のりの途中に白い木造の建物、「養浩館」がある。山道の休憩所にも使われている。翌日、老人はそこで私を待っていた。東京から電話で「ご存命の

関係者に、回天のことや大戦当時の話をお聞きしたい」と記念館に頼み、紹介されたのが現在「回天顕彰会」の副会長をつとめる高松さんだった。カクシヤクとしてお元氣、足腰もすっかりして84歳とは見えない。どうぞ、と奥に案内された。建物の中には、海軍旗、セピア色の当時の写真、回天の模型が飾られている。タバコを口にくわえて、高松さんは「なんでも聞いてください」とほほ笑んだ。外ではセミがひっきりなしに鳴いている。長いインタビューが始まった。

「6世紀」という認識

——『出口のない海』などを讀みますと「国のため」、「大切な人を守るため」戦つたとありますが、高松さんは当時どのように考えていらしたのでしょうか。

（それより前に、と高松さんが始めたのは「19世紀の世界情勢論」からだった）

高松 非常に意外なのは、どの大學生に聞いても、19世紀を知らないんですよね。19世紀のことを。そこが一番の問題の種なんです。19世紀っていう世紀は、実は世界の列強、

軍事力のある国は地図をみて、自分の好きなどころを勝手に武力で制圧するわけね。ほんで、それを植民地にする。それは、世界中誰も不思議に思わないですね。それが19世紀なんです。



それで、日本が一番恐れたのはどこかの植民地になるということ。なんとかして植民地になるまいと思つた。それが日本人の頭の中にあるました。

それで日清戦争、日露戦争になるんです。日清戦争、日露戦争はもちろん勝てる見通しは全然無かつた。だけれども幸いにして勝つことがで

きて植民地にならずにすんだ。

太平洋戦争の前の話になりますが、関東大震災、昭和恐慌、共産主義が広まっていく、そういうことがありまして、今度は日本が満州に出て行きますね。満州に理想的な国家を作ろうとする。それを、東洋に植民地をもつとる国々が国際連盟で絶対認めなかつた、それが日米戦の原因になっていくんです。

陸軍と海軍の認識差

板看板の大きな島の入り口に、島馬港=降りたフェリーを出て

高松 でも、実は、海軍大臣の米内光政、海軍次官の山本五十六は日本の力を分かつていた。それで部下に日本の国力っていうのを計算させるわけなんです。それで分

かつたのは、アメリカの戦力、戦争能力は日本の戦争能力の20倍あるということ。これはね、海軍士官の常識です。日本には石油がない。貴金属がない。だから、継戦、戦争を続ける能力は2年が最大だろう、と。

そこから、もし戦うなら、3年目にはもう無条件降伏せざるを得なくなるといことが分かつていたんです。

——そこまでの予測があつたんですか。「3年後の無条件降伏」のこ

とまで。
高松 そう、2年が最大限で、3年目にはもしアメリカと戦つたならば、無条件降伏せざるをえなくなる。

——それも（海軍では）常識だつたんですか。

高松 うん。それで山本大將も米内大將もありとあらゆる手をうつんですがね。日本国民、政治家を含めて、そんな日本の戦力・能力を知らないでしょ。だからアメリカが石油は禁輸、ABC D（米・英・中・オランダ）ラインで経済封鎖なんかやる。それで、国民の方は日本の戦力を知らないから「アメリカ叩け！」という風な雰囲気になつていく。

戦つたら負けてしまう。だから短期間にアメリカを叩いて大きな打撃を与えようとした。

——そうすれば勝てるのではないか、と。

高松 それが真珠湾攻撃（昭和18年12月8日）なんです。

——では一方の陸軍の方は、日本の国力を分かつていたんでしょうか。
高松 知らんかった。陸軍と海軍

との話し合いちゅうのは非常に少ないですわ。

——それでは海軍が国力を分かっているても、それを活かせなかつた。

高松 うん、山本五十六さんの右腕だった樋端（久利雄）参謀（中佐・山本長官と共にソロモンで死亡）、

このひとが、陸軍の將軍連中に、説明にいつとるんですよ。戦争の前に

樋端は「3年目には無条件降伏になるんだ」と説いた。それだけの力は日本にはない、戦争に勝つ力はないんだ、と。ところが、陸軍の連中は「ならば、なんで海軍はあれだけの膨大な予算をとって海軍作ったんか」と。それでケンカ別れになるくらい口論したんです。

実はね、陸軍は、終戦させまいとクーデター計画をしてたんですよ。それでいわゆる玉音放送を宮中にせめこんでいつて、やらせない。それから天皇を軟禁して、戦争を継続するという計画です。（昭和20年）8月15日のクーデター計画。実現はしませんでしたかね、そういう風なことを考えていた。海軍とは考えていることが違ったわけです。

《「玉音放送」を阻止しようとし

た陸軍将校の8・15クーデタ未遂事件を描いた映画に、岡本喜八監督「日本のいちばん長い日」がある》

海軍に憧れて

——高松さんが海軍に入ったのはいつですか。

高松 私は18年の9月に海軍に入った。海軍の士官たちと学生の時からよく話してたから海軍に憧れた。でも実は私は戦争がいやでね。兵器を作る技術士官ちゅうのがあったのよ。技術ちゅうのは戦争に行かない。研究家やから。それで受けたんです。

技術士官の試験ちゅうのはね、大変難しい試験なんです。でも実はね、この試験を受けた一番大きな理由は身長なんです。海軍士官の試験は、体格検査の中で、身長が1メートル55センチ以上なけりゃいかんです。私は、1メートル53センチしかないんです。身長が足りない。ほいでね、「おまえなあ、技術士官の試験は兵科の試験よりも、体格検査がルーズらしいで」という噂を聞いて。「それなら俺技術士官受けたるわ」ってゆうて受けたんですわ（笑）。

技術士官の試験受けに行ったら、

大きな紙をもらうんです。それに身長なんぼ、なんぼって書いていくんですね。一番初めが身長を測るところ。

見とったら、「身長ぶそく」と言われて追ひ返されている奴がいた。それを見て、自分もあそこに行ったら、身長不足で次が回れなくなつてしまう。そやから、逆に回ったんです。それで一番最後に身長を受けに行つた。私がなかなか測ろうとしなかつたら下士官が大きな声で「身長ぶそく」ってゆうんですよ。でも、軍医少佐か中佐が、「俺が測つてやる」と言ってくれた。他の項目はよく出来ていたんでね。ぽおんと背中を叩かれて測定した。それで合格させてもらったんです。

——合格後、どのようなことをなさっていたんですか。

高松 東京の目黒に、海軍技術研究所というのがありました。当時の日本のトップレベルの学者と技術者が集まるところです。そこに、私は電磁波爆弾の研究者で入りました。電磁波爆弾なんてのは、想像もつかないでしょうが、原爆、水素爆弾、その次の理想的な爆弾、最終的な爆弾だろうといわれた。その研

究員だったんです。

ところが、9月の終わりになってね、海軍の人事部長が、兵科に転向してくれないかという話をしに来た。その時、現在の日本の状況ちゅうのがどういうふうになつてるかちゅうのを詳しく聞いたんです。18年の終わりに、もう日本がニツチもサツチもならない状況だということを知りなかつた。私たちが青うびつくりしましたね。私たちは青うびなつた。そんなのは知らなかつたんです。まだ対等に戦っていると思つておつた。

それで私たちは、兵科という戦争屋に転向したんです。その時にここ（大津島）の連中と一緒になつた。この連中ははじめから兵科に入つてきた連中なんです。

私たちは、はじめはみなと一緒にやつとつたんだけれども、すぐに飛行機の整備を任せられることになつた。それで私たちは横須賀の海軍航空隊に入つていきました。100人くらいね。残つたものも、その後いろいろなところに分かれて、ここ（大津島）に残つたものがみんな死んでしまつたんですわね。

特攻の名簿作り — ヤな仕事してました

高松 航空に転向しまして、一番最初の戦争がサイパン戦です。その次は、硫黄島、その次は沖繩戦。日本のひどい戦争だけ全部やった。硫黄島からは私は幕僚付、参謀付兼先頭指揮官をやりました。作戦計画を立てる仕事ね。

——先頭指揮官ですか。一番危ない立場ですよ。

高松 死ぬる確立の一番高いところ。それを硫黄島と沖繩戦とでやっただけです。

サイパンのときは少尉になったばかりで役に立たない。なんの役にもたたないから、私は士官でありながら、自転車に乗って陸地を駆け歩く連絡係くらいのことしかできませんでした。仲間が出て行きはするけど、みんな帰ってはこん、えらいこっちゃな—と思っていました。

硫黄島からは自分が作戦計画を立てながら戦っていたけど、ボロ負け。沖繩戦は第五航空艦隊といまして、日本で一番大きな特攻隊やってました。ヤな仕事してました。

——第五航空艦隊は、特攻隊ですか。高松 一番大きい特攻隊ですよ。

実は特攻隊というのはみな同期生です。自分の同期生がみな海軍中尉で特攻の隊長をやっている。零式水上



偵察機という本来は偵察用の飛行機を、終わりがくると特攻に使っていたんです。

私は第二飛行士だった。私たちの仕事というのは、幕僚の出した作戦

計画をもとに、実際にどういう飛行機を使うか、誰を隊長で行かすかという原案を作る仕事です。だから、ひっくり返す言え、自分の同期生たちを殺す役なんです。ヤな思い

せなあかんかった。

しかし、その時は

旭日旗のかかっている養浩館は、高松さんが心を安める部屋のような部屋だった。円内は高松さん

戦つてますからね、嫌という風なことじゃなかった。私たちが大学出た士官たちは、戦つていて、勝てる見通しがないわ、ということを知つてる。だからね、このまま負けてしまったならば、日本がアメリカの植民地になるだろう、と考えていたんです。それならば、もうトコトン戦つてやろう。植民地はいやだと、指揮官をや

りながらそういうことを考えたのよ。それで特攻なんちゅうものを平然とやらざるをえない。トコトン抵抗してやるわちゅう気持ちにつながった。その思いで作戦を計画してました。

——作戦を練るには、強い精神力が必要だったと思います。

高松 鍛えられました。私を鍛えた参謀は下川有恒という飛行参謀です。私の上官です。

私には、担当飛行機が150機ありました。その150機が、今何時間使ったか、エンジン何時間使ったか、一兵が何時間使ったかを、戦闘するために四六時中頭に入れておかなければならなかった。それで毎日メモを持ってますよ。それで下川さんいろいろな質問をされて、私がメモを出すよね、下川さんは怒るんですよ。「こら、このやろう」と。「メモを見るな。メモでは戦争できないんだよ。ありとあらゆることを頭の中に叩き込んでおけ。頭の中に叩き込んでおかないと戦争はできないんだよ」と。

メモを見ると怒られる。だから四六時中、寝どつても、とにかく「今度はこうしてやろう」と考えて、鍛えられたんです。

その下川さんにこんな風に言われたことがあります。硫黄島の戦争が

「大正ロマンチストだ、お前は」

いよいよ負けだ、というところまできたときのことです。私は参謀室におつた。それで下川さんと二人だけになった時に、下川さんは「やい、飛行士」と。「てめえは大正生まれだなあ」。下川さんは明治の人なんです。「そうです」言いましたら、その時に下川さんは、にたりと笑いながらこんなこと言った。「そうかあ。大正ロマンチストだ」(笑)。「大正ロマンチストはなあ、どこかとかく心細いところがあるんだよなあ」と。

——心細い。

高松 うん。「今頃の若い者は」というのとおなじなんですがね。私は「今頃の若い者は」という言葉が大嫌いなんですがね(笑い)。ところが、その時、「大正ロマンチストはどうも心細い」と言われても不思議と一つも腹が立たなかつたよ。実際に戦闘が起こつて明治の人は俺たちとは違つてました。明治の連中は本当に骨が太いんだということを目の前で見てきたから。

そして、こんなことを言われた。「一言お前に話しておきたいがな。お前が計画立てるのをみていると、

自分のもつとる戦力の最大限で計画を立てている」と。これには反発しましたね。「だつてあれだけの戦力差があるのに、最大限の力でもつてやらなきゃ戦いはできませんよ」言うたら、「そりやそうだよ、だがな、いかなる場面がきてもとにかく人間という奴はなあ、余裕というもんが頭の中になけりゃいかんのよ」と。その時は「余裕が持たれますか」と言つただけけれども。

どういふんかなあ。なんかこう気持ち的に、余裕がなくなつていたんでしよう。ぎりぎりの生活してちゃだめというんでしようね。忘れられませんか。

最後に下川さんは一言こう言いましたよ。「まあ思い切つてやれよ、思い切つてやれ。お前のやつたことは俺が責任持つからな」

特攻を送り出す

——特攻の作戦計画、それはどのように決めていたんですか。

高松 いろんなデータもありますからね。最終的には技術的な面が一つありますよね、飛行機の操縦という技術的な面が。それからいわゆる体

力。一番悩みを持つのはいわゆる決断力、精神力です。特攻に耐えられるか、ゆうようなことがありますよね。——送り出すのは同期の方だったんですよね。

高松 そうです。

——それは相手を信頼して、(この人に)やつてほしいという思いから選ぶんですか。

高松 ああ、そうです。それに、難しい作戦であればあるほど、「これは俺でなければできん」と嘆願するものが出てくる。

——辛い選択ですね。

高松 苦い思いするのが2人おるんです。今でも夢にでるくらいです。小柳中尉と浜中尉を選んだ時のことです。小柳は同期生。浜中尉は一年以上です。

小柳中尉は早稲田の理工学部出、浜さんは東京高等士官。硫黄島のときのいわゆる標高低落するときね、私は磯野ちゅうて東北帝大出たやつ使う気でいたんですよ。

ところが小柳が来て、「やいこのやろう、今度の標高低落はどうしても一部電探(電気探知機)使わなきゃやれんぞ。ここの部隊で、電探を使

うんだつたら俺の右に出る奴はいないはずだ。俺以外にできる奴はいないんだからそのことは承知しとけよ。俺にやらせろよ」と言われた。それで私は磯野を使う気でおつただけけれども、考え直して、結局、小柳を選んで、殺したんです。

事後の本読んでみると、志願する、自分から行くつていう風なことはあまり書かれていません。しかし本当に「この作戦はとにかく俺でなけりやできん」と嘆願するようなやつがおるんですよ。

誰だつて命は惜しい

高松 誰だつて命は惜しいですがね。特攻隊の編成を決め、名簿を読みあげる時にそれがよう分かります。士官をみな集めて、第一飛行士の浜中尉が名簿を読むんです。「第一号機何々中尉、第〇号機何々中尉……」と。名簿を読み上げる彼の横で立つて、私は見ていました。特攻を覚悟しとつた奴が、呼ばればあつと顔色が変わつたのを。本当に出る命令文を読み上げると顔色変わりますよ。

そのあと、出すまで時間の余裕の

ある場合には、三十分間くらい、遺品の準備をしとけと一言言うて解散します。別れたあとにね、部屋に行ってみますとね、誰でもみな、毛布頭からばあつとかぶってますわ。しかしその毛布の下で、泣いとるかどうしとるか、それは分かりません。そりゃ心が動揺してるはずですがね。

私は見ていて嫌なんで、部屋に行つて「時間だー」と怒鳴りますわ。すると、ばあつと毛布からでてきます。その時にはみな、もうキリツとして冗談言います。

——冗談が言えるくらいにみんなの前では元氣に見せる。

高松 その間が本当に苦しいもんでしようね。冗談言いますよ。忘れられないのはねえ、浜中尉の時です。

——高松さんと特攻作戦を練つた浜中尉の時ですか。

高松 浜さんが自分の名前書いたんですよ。原案に。浜さん作るほうでしょ。それが自分の名前書いたんです。それで私は嫌だ言うたんです。「これ持つて行つたら幕僚に拒否されますよ」と。

幕僚たちはやはり拒否してね、「浜を殺したらあとで困りはせんか」と

言つて。それで原案を浜さんのところに持つて帰つた。「浜さんやつぱりこれ拒否されましたよ」と。私それだから、他の者使いましようよと言いました。「よく見ろ、これは俺でなければできっこないんだよ」と浜さんは言っていました。

私は、原案を持つていくのが嫌で、「そんなら私は持つてきませんから、浜さん自分で幕僚に持つていつてくれ」と言いました。そしたら一年先輩の浜さんは怒りましてね。「これでなけりやできんと説得するのがお前の仕事じゃー」。そう怒鳴つたんです。

結局それをまた持つていつて、参謀連中たちを説得して、これ以外にやる方法はないですから言うて浜さんを殺したんだけどね。

出撃前に、浜中尉は私に「やいこのやろう。貴様白木の箱、あの中は何入れるんかい」と聞きにきました。いわゆる白木の箱。「身に近いものをいれるんで、まあ爪とか髪とかとつておいてそれを入れるんですよ」。そう言いました。骨なんかもちろんですからね。異国で死ぬんだから。

それで、「ほおかあ。身に近いものを入れるんかあ。そんならなあ、俺の白木の箱にはフンドシを入れてくれ」とそんな冗談を言いました。浜さんが死んだあと、私がみんなに話すと、「浜中尉らしいな。ほんならお前とかくフンドシ入れてやれ」。そう言いました。

浜さんはね、行く前に「俺が死んだ晩ね、メソメソしたら承知せんぞ。大歌歌うて一杯やつてくれなあ」。そう言つてたんです。だから、死んだ晩、昭和20年2月17日。その晩には、みんなが酒を酌み交わして大歌歌おた。忘れられません。

私は司令官に怒られて踏みつけられた。それはね、旧部隊の司令官がすつとんできて、「浜を殺して次の戦闘できるんか」と怒鳴つたんです。シュンとしました。それで終わりにじゃないんです。次の日も次の日も戦争はせにやならんのだから。いい気持ちはしやせんですよ。

《戦後文学を代表する故島尾敏雄には、代表作『死の棘』（1977年）と並んで、原点となった特攻体験をつづる『島の果て』『出発は遂に訪れず』『出孤島記』など一連の作品

がある。九州大学を繰り上げ卒業後奄美大島で、「回天」と同様の海の特攻、震洋(艇)特攻隊の隊長だった。出撃日前の内面をこう描いている。

「出撃現場の具体的なイメージを描くことなどとてもできなかったのに、それは侵すべからざる輝きに満たされていた。(中略)ただそのとき限り自分を取り巻くすべての現実が全くの無に帰してしまふという底知れぬ暗黒をふと肌と感じ、いたたまれぬ恐ろしさに襲われるのも妨げなかった」(『魚雷艇学生』85年刊)》

タバコが一箱なくなる。ねじれてひしゃげたタバコで、灰皿がいつぱいになっていた。

終戦を迎える

——どのように8月15日を迎えたんですか。

高松 私はね、実は、本当なら沖繩で死んだらいいけど、急に電報受けて呼び出されて、戦争ほつたらかして広島に呉に帰ってきたんです。

日本の最後の戦争の指揮をお前がとれ、と命令されたんです。戦争は8月で終わつてますが、昭和20年の

10月に、アメリカが太平洋艦隊全力でもって、宮崎県と鹿児島湾に上陸するという情報があったんです。

——そんな計画が。

高松 それで零式水上偵察機、それが400くらい残っている。それを使ってアメリカとの第1回戦をお前やれ、と言われたんです。ただ、その水上偵察機は、250キロの爆弾しか積めない。ところが800キロの魚雷を抱いて、爆撃じゃなくて雷撃として飛行機を使うという作戦を、上は考えていたんです。それで改造の実験をすることになった。改造してくれないかと。それで月の終わりから7月まで、改造テストをしたんですよ。

——実はこの実験成功したんです。しかし訓練に入ったらたんに8月15日終戦になった。

——実行されなかつたんですね。

高松 そんなことをむちゃくちゃやらされたけれども、それをやったために私は生き残るはめになったんです。終戦を迎えた。

——戦争終わったときに、たまたま私は実験の飛行機にのつとつたんですわ。飛行機で帰ってきたら、戦争の

ラジオ放送おわつとつた。帰ってきたら下士官がね、「よう分からんのですけど、戦争に負けたららしいですよ」と伝えた。それでその下士官がね、戦争に負けたらこれからの日本がどういふふうになるか話をしてくれと、私に頼んだんです。

私はそのときの事はよく覚えていませんでしたがね、「やなこっちゃ、アメリカの植民地なんてやなこっちゃ」言うてそのまま逃げて、話も何にもしてくれなかつたと部下は言つてましたね。まあ私は実験の報告せにやならなくて忙しかったからそれで逃げただけの話なんですがね。

戦争体験者として

——現在の教育基本法の改正、憲法の改正。そういう風な動きはどのように思っていますか。

高松 それはねえ時代の流れでね。やっぱり。教育基本法だけじゃなく、どれでも法律は、何年かしたら変更せざるを得なくなるんですよ。憲法だって何年かたつたら、それを見直す時期はある。

しかし、その見直す時期にどうもおかしいのがなつたら困るというこ

とですよ。しかし、本当に、今のリーダーたちは、本当の意味での悲しさは知らないんだと思います。靖国参拝を明言しています。これについてはどう思いますか。

高松 靖国つちゅうのは難しい問題だと私は思います。宗教からはずすわけにはいかないですよ。宗教から外したら靖国というのは成り立たないですからね。

しかしお参りする人は、宗教的な意味はあまりない。行事が宗教的な行事であっても違和感なくお参りする。

私は参るべきもんだと思うんですよ。靖国はね。というのは私の靖国に対する思いは、みなさんと違うんです。

——参るべきもの、ですか。

高松 個人的な気持ちですよ。私は指揮官でしょ。特攻出すでしょ。その話を少ししますがね。

特攻はね、グループで出すんです。その飛行機の整備を私はしていたんです。

それで、隊長の飛行機だけは、私は指揮官として必ず誰にも試運転や

らせない、最後の試運転をやるだけ決めていました。私が試運転をして、そして隊長が乗り込んでくるんです。それで隊長と話をして、握手してから、特攻を出した。

それで、当時みんなにね、その時に一体なんの話をするのかとよく聞かれました。当時の私はごまかして、人によって違ふよと言つていたんですがね。でも、本当は、みんなあれと同じ話なんです。

特攻はね、初めの頃はいい飛行機使っただけでもね、終わりがくると完全な飛行機じゃないのを出すことが多いんです。その不完全な飛行機に乗る、その不安感をなくすために、私が入れ替わったときに、同期生の隊長に「飛行機は大丈夫だよ」と言うんです。大丈夫な飛行機じゃないこともあるんだけど、それでも、飛行機大丈夫だよ。隊長はね、「ご苦労だったなあ」と言いますよ。そして、その次の言葉はみんな同じだったんです。握手しながらね、「次は靖国で会おうよな」。死ぬる時にそういう別れ方したんだよ。

それから私が飛行機から降りて、

指揮所から信号を出して、中央に立って手をあげて、「用意しろ」と合図します。声じゃ聞こえませんかね。手を広げて、「車輪止め、外せ！」。それではあつと出て行くんですがね。そういう別れ方なんですよね。だから、私にとつての靖国は、一般の人が考えている靖国とは違います。全然違います。だから私たちが東京行くときは、時間のある限り靖国まで足を伸ばしますよ。

平和を考える

——今後、日本の戦争体験者は減っていきます。そんななか高松さんは、どういうことを伝えていきたいですか。

高松 実はね、前は講演頼まれても、小学校中学校の講演はお断りして一切やらなかった。私が小中学生に歴史の話をしたら子供たちは混乱するだけだから。全然違いますからね。高校だったら理解できると思うが。それで小学校中学校の講演しなかったんです。去年から頼まれて中学生の講演はすることにしましたがね。しかし頼まれても戦争そのもの話ではなくて、戦争の悲惨さと

いうものだけ話します、と言ったんです。感想文なんかきたのを見ると中学生でも戦争の悲惨さはやっぱわかるらしいですがね。

以前頼まれて随筆を書きました。そこで私は戦争はなくならない、と書いた。結論としてね。世界中に何百という国があるでしょう、何百という国がある。それから、民族ちゅうものがある。いやなことに、宗教も数え切れないほどある、そういう



「未来の風」。
モニュメント「未来の風」。
高台にあった

中大出身者もいた

養浩館で買い求めた『回天』を読んで、目が釘付けになった。回天搭乗員の中には、中大出身者の名前もあつた。難波進(千早隆)、館脇孝治(多々良隆)である。館脇孝治の、絶筆となつた遺書が残っている。

△私ハ台湾ニテ出生セシ日本人
デス 甚ダ伸ビ伸ビト育ツテ参リマシタノデ時々馬鹿ナ事モヤリマシタ
館脇孝治 天之邪鬼 一言申す
小生ボン助に非ず 天下無敵 昭和二十年二月二十日夜 豚児▽
ユーモアさえある珍しい遺書であ

る。隊のムードメーカーだったかもしれない。これが書かれた約2カ月後の4月3日、沖繩にむけて出撃、17日南洋のわだつみに散った。

《勝とうが負けようが、いずれ戦争は終わる。平和な時がきつとくる。その時になって回天を知ったらみんなどう思うだろう。なんと非人道的な兵器だといきり立つか。祖国のために魚雷に乗り込んだ俺たちの心情を憐れむか。馬鹿馬鹿しいと笑うか。それはわからないが、俺は人間魚雷という兵器がこの世に存在したことを伝えたい。俺たちの死は、人間が兵器の一部になつたことの動かしがたい事実として残る。それでいい。俺はそのために死ぬ》

——『出口のない海』の主人公、並木のつぶやきである。

平和を考える、そしてそれを選び取る。戦後生まれの私たちは、複雑な今を「戦前」にしてはならない。

× × ×

この取材は、FLP松野(良一教授)ゼミの研究テーマ「私は島で考えた」の一環として池内単独で行い、『Hakumonちゅうおう』用にインタビューの詳細を編集構成した。